

# 高島俊男『漱石の夏やすみ』

緑川 隼人 旭川校教員養成課程国語教育専攻1年

森鷗外、芥川龍之介、永井荷風、中島敦——。日本には、漢文の素養を持つ作家が多い。その中でもとりわけ夏目漱石は、一四歳の時より二松学舎（漢学塾）で漢文を学び、晩年も小説の執筆の合間に漢文・漢詩を創作していたというのだから、彼の人生と漢文が深い関係であったことが伺える。本書は、漢文に明るい夏目漱石が二三歳の時に友人四人と房総旅行に出かけた際に、同じ第一高等中学校の生徒である正岡子規に見せるために作った漢文紀行である『木屑録』の解説と日本人と漢文の関わりについての考察である。

本書は、木屑録訳、漱石と子規、「漢文」について、日本人と文章、木屑録をよむ、木屑録活字版の六つに章立てられている。印象的なのは著者による『木屑録』の現代語訳である。著者は漢文を日本語に訳し、その日本語で意味を理解することをナンセンス、バカバカしいことと捉え「訳語一定、全部一律荘重体」「チンプン漢文」であると記している。漢文は漢文のまま、視覚のみで、文字面をみて、きれめ、リズム、意味、気分を理解するように読むことを大切としているので、その訳は固い従来の訳と比べ、親しみやすいものとなっている。例を挙げると、

余兒時誦唐宋數千言喜作爲文章或極意彫琢經旬而始成或咄嗟衝口而撥自覺澹然有樸氣謂古作者豈難臻哉遂有意于以文立身

という文を、他の注釈家たちは、

余兒たりし時、唐宋の數千言を誦し、文章を作り爲すを喜ぶ。或は意を極めて彫琢し、旬を経て始めて成り、或は咄嗟に口を衝いて發し、自ら。澹然として樸氣あるを覺ゆ。竊に謂へらく古の作者豈難り難からんやと。遂に文を以て身を立つるに意有り。

と書下すところを

我輩ガキの時分より、唐宋二朝の傑作名篇、よみならつたる數千言、文章つくるのをもつともこのんだ。精魂かたむけねりにねり、十日もかけたる苦心

の作あり。時にまた、心にうかびし名文句、そのままほれば瀟洒のできばえ。むかしの大家もおそるるにたらんや、お茶の子さいさいあさめしまへ、これはいつちよう文章で、身を立てるべしと心にきめた。

と訳している。なぜこのような訳になるのか。友人同士である漱石と子規のやり取りを現代人にもわかるように再現するためには、難しくかきこまった文章は適していない。房総旅行の前に漢詩文集を見せてきた正岡に刺激を受けて、「俺のほうが漢文できるぜ」と書いたとされる『木屑録』であるので、友人との会話のような訳の仕方が適していると著者は考えたのだろう。豈臻り難からんやがお茶の子さいさいあさめしまへである。意味としては、「簡単なこと」と同じだが話し言葉のお茶の子さいさいのほうがわかりやすく、日本語としての言いやすさ、リズムの良さが出ている。

また、著者は中国文学の専門家という立場から、『木屑録』に添削、修正を行っている。先に述べた余兒時誦唐宋數千言の部分は余兒時便誦唐宋數千言に直せば「そんなにはやくからもう」の気分をうまく表すことができるという。批評は正岡にも及ぶ。漱石は子規の漢文を評し、「處が其大将の漢文たるや甚だまづいもので、新聞の論説の假名を抜いた様なものであった」といつているがそれについて、

いいえて妙。漢字の文だから「漢文」には相違ない。しかし文章にはなっていない。子規の文章は発想が日本語である。箸にも棒にも掛からない。(一部要約)

と述べている。もはや悪口ともいえる批評は痛烈であり、著者が専門家としての矜持から学生時代の夏目漱石、正岡子規の文章を採点してみたくなった気持ちがうかがえる。漱石が木屑録を作ったのは明治二二年であるが、そのころ日本の青年、それも西洋の学問に志している青年がまっとうで長大な漢文をつくるというのは珍しいことである。だが、二〇数年前まではそれこそが学問であったのだ。著者はその時代においても漢文を勉強しようとする漱石に心惹かれ、『木屑録』に添削を行おうとしたのではないだろうか。

日本人と文章のかかわりに関する筆者の見解についても触れておこう。まず、

支那には文言と呼ばれるものがあり、話し言葉とは違うものである。読むためには学習が必要であり、書くには訓練がいる。支那での手本となるのは左伝、漢書である。だが日本人には自分の国の言葉による標準的な文章の手本となる書物がない。文章は口語が多いので書く訓練もしない。したがって、日本人には日本語の文を作品として見るといふ観念がない。文章と内容を別のものとして捉える文化が根付いているからである。と著者は述べている。

木屑録活字版のほかに、漱石の木屑録自筆稿本の写真版がのせられている。著者は漱石の文章が一区切りつくと改行していることに着目し、木屑録全文を十七つに分け、章として扱っている。また、章を内容ごとに三つに分け、構成を示している。本稿では、紙幅の都合により、全部を紹介することはできないが、著者が本編と考えている第二部を紹介する。第二部：第九章 鋸山と日本寺、第十章 保田のトンネル、第十一章 友人米山のこと、第十二章 保田のトンネル、第十三章 保田湾の巨岩、第十四章 小湊、誕生寺、第十五章 詩五首。以上の構成となっている。構成を示すことで、『木屑録』を読みやすくしているのが本書の特徴である。

本書の前半部分では、漢文であるために余り知られることのなかった『木屑録』の面白さを著者の軽妙な日本語訳で明らかにしつつ、解説を加えることで読者側の理解を深いものにしていく。また、漱石と子規それぞれの印象を変える友人としての関係性を教えてくれる。後半部分は、日本人と漢文の付き合い方への批判を交えた評論文となっているので、一冊読んだ後には近代文学史の授業を受けたかのような充足感がわいてくる。漢文訓読については前述したように、ナンセンスで必要のないものとしているので学生時代に漢文が苦手だった人なら、「そうそう、だからわからなかったのだ。」と首肯できる内容のものになっているだろう。